

日 语

句 法 与 篇 章 法

监 修 刘和民
主 编 陈 岩
副主编 刘晓华
罗丽杰
孟海霞

北京大学出版社
北 京

图书在版编目(CIP)数据

日语句法与篇章法 / 陈岩主编. —北京: 北京大学出版社, 2001. 10

ISBN 7-301-05265-0

I. 日… II. 陈… III. ①日语—句法②日语—语法 IV. H364

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2001) 第 072308 号

书 名：日语句法与篇章法

著作责任者：陈 岩

责任编辑：许耀明

标准书号：ISBN 7-301-05265-0/H·0675

出版者：北京大学出版社

地 址：北京市海淀区中关村北京大学校内 100871

网 址：<http://cbs.pku.edu.cn/cbs.htm>

电 话：出版部 62752015 发行部 62754140 编辑部 62753334

电子信箱：zpup@pup.pku.edu.cn

排 版 者：北京华伦图文制作中心

印 刷 者：世界知识印刷厂

发 行 者：北京大学出版社

经 销 者：新华书店

850 毫米×1168 毫米 32 开本 8.875 印张 210 千字

2001 年 10 月第 1 版 2001 年 10 月第 1 次印刷

定 价：13:00 元

前 言

一、本书是为高等学校自学考试日语专业本科阶段编写的教材，即课程设置计划中“句法、篇章法”的教材。因日语自考专科阶段已有以讲解词法为主的“日语语法课”，所以本书对词法只是略加提及。

二、日语语法只有一个，但对语法的解说却是众说纷纭，诸如山田语法、桥本语法、时枝语法等，还有一般所说的“学校语法”（即日本“中学语法”）。考虑到我国日语教育的历史、现状及日语学习者的实际情况，本书在编写过程中，坚持既不拘一家之言，又不无限制扩展的原则，即以“学校语法”为主，同时吸纳其他派别便于我国日语学习者理解、领会、掌握的观点。从这一意义上说，应该是一种新的尝试。

三、从实际内容而论，“篇章法”应该相当日语语法中的「文章論」（談話）。日本出版的“文章论”不少，但内容、结构差别较大，我们在这部分的编写中，既注意不要把它写成“作文”教材，又注意在阐述理论时结合实际，方便学习者领会与应用。

四、掌握适当的繁简难易程度是我们在编写中十分注意的问题。我们以教育部高等学校外语专业教学指导委员会日语组编写的《高等院校日语专业基础阶段教学大纲》和《高等院校日语专业高年级阶段教学大纲》为基准，对内容进行了界定，

使其比较符合大纲的要求。因此，本书也可以作为普通高等学校日语专业的教材。

本书在编写过程中参考了国内外有关书籍，借鉴了部分研究成果（具体见本书最后一页），得到了北京大学出版社许耀明先生的指导，在此一并表示感谢。

由于编者水平有限，加之时间仓促，疏舛和错误在所难免，殷切希望专家、学者及使用者赐正。

编 者

2001 年暑日

目 次

上 編.....	5
一 文と構文論.....	6
(一) 文とは.....	6
(二) 語とは.....	6
(三) 文の特徴.....	8
(四) 文章や談話.....	9
(五) 単文と複文.....	9
(六) 構文論.....	11
(七) 文表現の階層.....	11
練習問題.....	12
二 文の成分.....	13
(一) 主題.....	13
(二) 主語.....	17
(三) 述語.....	20
(四) 補足語.....	21
(五) 連用修飾語.....	27
(六) 連体修飾語.....	31
(七) 独立成分.....	34
練習問題.....	38
三 ヴォイス.....	40
(一) 「ヴォイス」とは.....	40
(二) 受動態.....	41

(三) 使役態	48
(四) 使役受動態(被役態)	57
(五) 可能態	58
練習問題	62
四 テンスとアスペクト	66
(一) テンスとは	66
(二) アスペクトとは	73
(三) テンスとアスペクトの副詞	89
練習問題	91
五 複文の接続節	96
(一) 複文とは	96
(二) 補足節	96
(三) 副詞節	97
(四) 並列節	118
(五) 従属節の従属度	121
(六) 従属節のテンス	122
練習問題	123
六 ムード	127
(一) ムードとは	127
(二) 「ことに対する」ムード形式	127
(三) 「人に対する」ムード形式	159
練習問題	181
七 注意すべき構文	189
(一) 存在、所在、所有の構文	189
(二) 感情述語の構文	192

(三) 授受の構文.....	194
(四) 否定の構文.....	199
(五) 疑問の構文.....	201
練習問題.....	208
下 編.....	211
一 文章と文章論.....	212
(一) 表現.....	212
(二) 文章と文章の性質.....	214
(三) 文章の種類.....	215
(四) 文章論.....	217
(五) 文章心理学.....	218
練習問題.....	218
二 文章の構成.....	220
(一) 主題・構想・材料.....	221
(二) 事柄の配列.....	223
(三) 文章の構成.....	224
(四) アウトライン.....	228
(五) 段落.....	230
(六) 文の続け方.....	234
(七) 文の表し方.....	237
練習問題.....	237
三 文体.....	238
(一) 文章の型としての文体.....	238
(二) 個人文体.....	239
(三) 文体の観察.....	240

(四) 文体の確立.....	242
練習問題.....	242
四 話しことばと書きことば.....	243
(一) 話しことば.....	243
(二) 書きことば.....	246
練習問題.....	250
五 文章の表現技法.....	251
(一) レトリックと修辞法.....	252
(二) 文章のリズム.....	256
(三) 一語法.....	257
練習問題.....	258
六 日本語表記法.....	259
(一) 文字.....	259
(二) 表記.....	259
(三) 漢字.....	259
(四) 仮名.....	262
(五) くぎり符号.....	263
練習問題.....	267
練習問題解答.....	269
参考文献.....	275

上 編

一 文と構文論

(一) 文とは

我々は言語を用いて意志を伝達するわけであるが、言語の単位は、形態素（意味を持った最小の音形）→語→連語（二つ以上の単語が一つづきになって複合した観念を表わすもの。「節」を含む）→文→文章（談話）のようにより小さい単位からより大きい単位に分けられる。文は言語表現の最も基本的な単位である。

(二) 語とは

1. 文を構成する単位の中で最も基本的なものは語（単語ともいう）である。

2. 語は文を作るための最も重要な材料であり、文を組み立てる上で一定の働きをする。この職能の違いによって語を種類区分したものが「品詞」である。例えば、「太郎が重い荷物を軽々と運んだ」という文と「次郎は仕事で忙しい」という文では、補足語や主題の中心になる役割を担う「荷物」や「仕事」のような語を「名詞」と呼び、単独で述語の働きをする「運ぶ」のような語を「動詞」と呼び、単独で述語になるという役割、および、名詞を修飾するという役割を担う「重い」や「忙しい」のような語を「形容詞」と呼び、述語を修飾する働きをする「軽々と」のような語を「副詞」と呼ぶ。

3. 日本語文法で、品詞としては普通「名詞」「代名詞」「動詞」「形容詞」「形容動詞」「連体詞」「副詞」「接続詞」「感動詞」「助動詞」「助詞」の11種類が区別される。

文の数(文として可能なものの数)が無限であるのに対して、その材料である語の数は有限である。我々は、有限の単語を用いて、限りない数の文を作ることができる。

4. 語の構造

語には、一つの要素だけからなるものと、複数の要素からなるものがある。複数の要素からなるものについては、一つの語の中でどのような要素がどのような関係で結合しているか、ということが問題となる。このような、語の構造の面から見て特に問題になるのは、「活用語」「派生語」「複合語」の三つである。

5. 活用語

「活用語」とは、文中での働きの違いに応じて形を変える語、すなわち、語形変化する語をいう。活用語には用言(動詞・形容詞・形容動詞の総称)と助動詞が含まれる。例えば、

「食べる」 食べる 食べよう 食べた 食べれば

「早い」 早く 早かった 早ければ

「愉快だ」 愉快だった 愉快的な 愉快なら

のような種々の形で用いられる。

6. 派生語

ある語に付加的要素が付いてできる語を派生語という。この付加的要素を「接辞」という。また、接辞の付加を受ける、派生語の中心要素を「派生語幹」という。語幹の前に付くものを「接頭辞」、後ろに付くものを「接尾辞」という。接頭辞は一般に、派生語の品詞のあり方に影響しないが、一部の接尾辞はもとの語の品詞を変化させる。例えば、

接頭辞が付加するもの

お名前、ご心配、み仏、ま夏、す(素)顔、おお(大)雨、
こ(小)鳥、む(無)関心、ふ(不)満足

ぶち壊す、とり壊す、ひき受ける、たち遅れる、とり決める

ま新しい、ひ弱い、か細い、こうるさい、けだるい、たやすい、て(手)痛い

接尾辞が付加するもの

田中さん、渡部君、吉野氏、ぼくら、私ども、彼等、一日目、四人分、三冊、2メートル、5倍、一位

暑さ、深み、憎げ、話し手、持ち主、利き目、強気、やりかた、見かけ、ありよう、春めく、汗ばむ、涙ぐむ、こわがる、古くさい、照れくさい、安っぽい、現実的

7. 複合語

「複合語」とは、複数の語が結合して一語となったものをいう。複合には、並列的な性格のもの(例えば、「上がり下がり」と、そうでないもの(例えば、「上がり口」と)がある。後者の複合語においては、一般に、後続する要素(「後項」と呼ぶ)が中心になり、先行する要素(「前項」と呼ぶ)がそれに従属する。複合語の品詞については、並列的な性格の複合語は原則として名詞である。一方、後項が中心要素になる複合語には主として、名詞(例えば「うれし涙」)、動詞(例えば「腰掛ける」)、形容詞(例えば「粘り強い」)がある。後項が中心要素になる複合語においては、後項が複合語全体の品詞を決定することになる。以下の複合語もこの類である。

春風 雨雲 長生き 薄着 筆入 受け取り 心得る 心細い

(三) 文の特徴

文の特徴としては、それは形態的独立体、構造的統一体、意味的完結体であるということで、分かりやすくいえば、あるまとまった内容と構造を持ち、形の上で、前後に音の切目があつ

て、意味が完結した（表記においては句点が与えられる）言語の単位である。意味の完結性は文の重要な特徴である。

（四）文章や談話

文章や談話は、複数の文の有機的な組合せによって構成される。例えば、

- 日本には、たくさんの宗教があります。第二次世界大戦前までは、一つの宗教だけを熱心に信じている人は別ですが、多くの家には神だなど仏壇がありました。一つの家で神道の行事も、仏教の行事もおこなわれていたのです。

これは、三つの文からなる談話である。

また

- A：今度の休みに家へ帰りますか。
- B：いや、どこかへ旅行するつもりです。

AとBの対話も一つのまとまった談話である。

（五）単文と複文

1. 単一の述語を中心に構成された文を単文という。例えば、「太郎が重い荷物を軽々と運んだ。」「次郎は仕事で忙しい。」のような文は、いずれも述語を一つしか含まない単文である。

2. これに対して、複数の述語からなる文を「複文」という。例えば、「太郎が重い荷物を軽々と運んだので、花子は驚いた。」という文は、「運んだ」「驚いた」という二つの述語を含む複文である。

複文を構成するところの、述語を中心とした各まとまりを、「節」と呼ぶ。先の例文では、「太郎が重い荷物を軽々と運んだ

ので」と「花子は驚いた」が「節」である。複文は二つ以上の単文が「節」となって、なんらかの形でその一成分としての働きをする、拡大された複雑な文と考えてよいのである。

① 複文は複数の節で構成されるが、それらの中で、原則として、文末の述語を中心とした節が文全体をまとめる働きをする。この節を「主節」と呼ぶ。主節以外の節は、主節に対して特定の関係で結びつく。これらの節を一括して「接続節」と呼ぶ。先の例文について言えば、「花子は驚いた」と「太郎が重い荷物を軽々と運んだので」が、それぞれ主節と接続節に当たる。

接続節は、主節に対する関係の違いによって、「従属節」と「並列節」に分けられる。

② 「従属節」とは、主節に対して従属的な関係で結びつくものをいう。例えば、

- 君が行くなら、ぼくは行かない。
- 春になると、花が咲く。

「君が行くなら」と「春になると」という接続節はそれぞれ主節「ぼくは行かない」と「花が咲く」に対して従属関係にあり、「従属節」の例となる。

③ 「並列節」とは、主節に対して対等に並ぶ関係で結びつくものをいう。

名詞の場合であれば、例えば、「今日と明日」「教科書と辞書」のような「今日」の「明日」に、「教科書」の「辞書」に対する関係である。

- 山は高く、水は深い。
- 花も美しいし、香もよい。

この二つの文では、接続節である「山は高く」「花も美しいし」と、主節「水は深い」「香もよい」は、並列的な関係にある。したがって、この二つの文は並列節と主節からなる複文である、

と見ることができる。

(六) 構文論

語を扱う文法を形態論といい、文を扱う文法を構文論という。構文論（統語論・統辞論、シンタクス、ともいう）は文を構成する要素の配列様式と、その機能の解明を主な目的とする分野である。伝統的な定義に従えば、語と語の結合の仕方を研究対象とする分野である。

(七) 文表現の階層

文表現には二つの階層レベルがある。すなわち命題のレベルとムードのレベルのことである。

命題レベルは表現主体からは一応独立した客観的な対象にかかわるレベルで、ムードのレベルは表現主体に直接かかわるレベルである。

命題のレベルはさらにその内部において総称的に表す「名付けのレベル」（これを a とする）とそれを具体的な個別的な事態として表す「現象のレベル」（これを b とする）とに分けることができる。例えば「雨が降る」という文は「降雨」ということを総称的に表すだけで、どこで、いつ、雨が降ったか、降っているかなどについては述べられていない。b のレベルになって始めてそれが個別的な現象として捉えられ、「（これから）雨が降る」「（今）雨が降っている」「（もう）雨が降った」という形の表現になるわけである。

命題のレベルを土台にして、ムードが機能する。ムードも「判断のレベル」（これを c とする）と表出のレベル（これを d とする）の二つに分けることができる。c の判断のレベルで言語主

体がある現象について、その真偽、価値づけなどを定める。やはり「降雨」を例にすれば、この判断のレベルで、確かに「雨が降る（降った）」か、あるいは「降る（降った）かもしれない」かを定める。

a → b の段階で現実化された命題事象に主体的な判断（c）、さらに話しの場に即した、聞き手向けの伝達とか、命令、依頼、質問とかの表出（d）という、より高次元の主体的な働きが作動して文が完成されるわけである。

練習問題

1. 文とはなにか。
2. 語とはなにか。
3. 日本語文法で、品詞としては普通どう区別されるか。
4. 「活用語」「派生語」「複合語」を説明しなさい。
5. 接尾辞がもとの語の品詞を変化させた派生語を三つ挙げなさい。
6. 複合語には、並列的な性格のものと主従的な性格のものがあるが、二つずつ例を挙げなさい。
7. 文の特徴をいってみなさい。
8. 単文と複文はどう定義されるか。
9. 「節」「主節」「接続節」「従属節」「並列節」を、例を挙げて説明しなさい。
10. 構文論とはなにか。

二 文の成分

(一) 主題

1. 主題は平たく言えば文の題目である。文は何かについて述べるものであるが、その述べられ、つまり判断・叙述・描写の対象を取り立てて主題と呼ぶ。

2. 注意すべきこと

① 主題は既知の情報でなければならない。つまり主題は話し手にとっても、聞き手にとっても知っているものごとでなければならない。

- ゆうべ雨が降った。雨は明け方止んだ。

(「雨は」は前文に出た雨である)

- 雨は水滴である。

(「雨」は誰もが知っているものである)

- 次郎は仕事で忙しい。

(「次郎」という人を聞き手が知っているものでなければ何を言っているか分からない。)

② 文中のどの成分も主題になり得る。

- 山田さんはきのう図書館から歴史の本を借りた。

(「山田さん」を主題にする)

- 歴史の本は山田さんがきのう図書館から借りた。

(「歴史の本」を主題にする)

- きのうは山田さんが図書館から歴史の本を借りた。

(「きのう」を主題にする)

- 図書館からは山田さんがきのう歴史の本を借りた。

(「図書館」を主題にする)